

## 森の温泉～駒の湯通信（歴史編）

父が駒の湯の歴史をまとめていましたが、土石流に埋まりました。大切な命に、皆が大事にし、頑張ってきたのが無くなり、震災直後の誤った情報や無力感、喪失感、自責の念に苦しみ、なかなか一歩が踏み出せずにいました。7年後、やっと温泉を日帰り温泉に復活させましたが、何をするにも壁にぶつかり、不安なままでした。しかし、栗ちゃんが歴史のまとめを手伝ってくれることになり、聴き取りを始めていく中で、不便な山の温泉宿として頑張ってきたこと、開拓団を受け入れたことでインフラが整い、今の暮らしや観光地化につながったということに気づき、駒の湯が果たした役割を認識できました。



その昔、沼倉屋と文字屋の二軒宿だったのをどちらか一軒がやろうという事になり、曾祖父が買い取って駒の湯を始めたと聞いていました。戦前から曾祖父に気に入られて駒の湯の手伝いをしていた父は戦地から無事に帰還しましたが、母を置いて満州に出た祖父母たちは戻ってきませんでした。曾祖父は母に駒の湯を継がせ、婿養子に父を迎えることにしました。

曾祖父は息子の葬儀に来た、丸森の村長八島氏から満州からの引揚げ者の行き先が無いことを聞き、駒の湯で受け入れることにしました。丸森の耕野よりも良くなるようにと、後には「耕英」という名前が付けられました。

その後、観光地としての発展を願って、国定公園にすべく、駒の湯キャンプ場をつくるために土地を貸したり、登山道をつくるのに、人の手配をしたりと、観光地としての発展に父は人一倍努力をしてきました。



歴史を書き出してみると...



栗ちゃんが一緒に聴き取り資料を集めまとめてくれます。



沼倉屋さんの漆器



栗電路線図

鶯沢村に400年前駒の湯を発見した小野寺氏は四代まで経営したと記載があります。金剛寺に台風で流された墓石を集めて墓を再建した際、駒の湯の事も石碑に刻み建立されています。しかし、その後、誰が経営したのか不明な点も多く、火災で焼失した時期があり、その後再建した時のことや沼倉屋さんに経営が引き継がれた経緯はわかりません。

駒の湯温泉は、山の中の温泉でしたが、その泉質を求めて、湯治のお客さんも来ていて、宿泊者が増えると温泉横に、町営ヒュッテ、細倉鉾山の保養施設、栗鉄山の家などが建てられ、駒の湯温泉旅館には泊まらないものの、駒の湯温泉に入った人も多くいました。

400年前に発見した小野寺氏や沼倉屋さんのご子孫に会えると思えませんでした。栗ちゃんが来るようになってから引き寄せられるように会うことができ、歴史を知るほどに複雑な気持ちになりながらも、400年続く理由を改めて考えるようになりました。

今もなお、皮膚疾患を含め、病気の回復を願い来る人たちがおられ、たくさんの方が駒の湯に思い出を持っているという事を知り、駒の湯は個人的なものではないのだと感じました。

崖崩れを見ると痛々しく、ご遺族の気持ちを考えると、この地が癒しの地になると思えませんでした。400年の歴史と被災地になってもなおこのお湯やこの地を目指して来てくれる人がいると考えると、お湯やこの地には不思議な力があるのではないかと感じるようになりました。それだけに後世に残したいです。

歴史を調べまとめることでお湯を守っていく意味や意義を見出せました…この地と温泉の持つ力を伝えて守る活動をこれからも続けていきたいです。栗ちゃんやその他応援してくれた方々と関係者に感謝です。



たくさんの方の苦労や苦闘があつて、今の駒の湯がある。いつかみんなの癒しの温泉と居場所になりますように…

駒の湯の関係者の皆さまや聴き取り資料や写真の提供などご協力に感謝しています。これからも写真や情報の提供をお待ちしています。